

博士論文全文の要約

(インターネット公表用)

文化科学研究科 国際日本研究専攻

氏名 ふり がな うき み ともゆき 宇佐美 智之

(学籍番号) 20130301

論文題目 集落動態にみる北部九州弥生社会の生成と展開

日本列島の諸文化・社会は東アジア隣接諸地域との関わりの中で発展・変容してきた。その歴史の中でも、中国・朝鮮半島との直接交渉が本格的に始まり、文物・技術・知識の受容が大きく進展した弥生時代は特筆すべき内容をもっている。本論文は、このような認識をもとに弥生時代を日本の国際化過程における重要な段階と位置づけて、弥生社会の生成・展開の様相とその特質を集落研究の立場から考察したものである。この試みにおいては、大陸側との交渉・交流において特に重要な役割を果たしたと考えられる北部九州（主に福岡県、佐賀県および長崎県の一部に相当する九州島西北部）を中心対象地域とした。

序章では研究史をたどり、その到達点と問題点を整理した。従来の弥生集落研究では、集落の形成過程や内部構造の復元、また一定領域（地域）内における集落数の増減や分布変化の把握などをつうじて集落動態の解明が試みられてきた。このような研究視点は地域社会（集団）の性格・構造を議論するうえで非常に有効であると考えられる。しかしその分析の方法・内容は、「考古学 GIS」や地理学的観点からすると必ずしも十分なものではない。加えて、北部九州地域においてなされてきた集落動態分析では、地理的ないし行政的な区分に依拠して限定的な領域を扱うにとどまる場合が多く、対象域内における総合的研究の試みは不足している。本論文ではこれらの問題点を考慮に入れ、北部九州を 4 地域（博多湾沿岸周辺域、佐賀平野、筑後平野北部、筑後平野南部）に大別したうえで、GIS（地理情報システム）の空間分析手法を応用して弥生時代早期から古墳時代開始期頃における各対象地の集落動態を整理し、総合的考察を実施するという方針をとった。また、この取り組みによって得られた理解をより広い文脈の中に位置づけつつ深めるため、北部九州隣接諸地域、九州以東の西日本諸地域における集落動態の概要をまとめるとともに、朝鮮半島南部の無文土器・原三国時代における集落の動向や、北部に所在する楽浪郡関連の都城の様相、そして中国新石器時代から漢代頃にみる環濠集落や都市の展開過程について整理・確認することとした。

第 I 章では研究の対象と方法について記述した。本論文ではまず、上述の北部九州内 4 地域（博多湾沿岸周辺域、佐賀平野、筑後平野北部、筑後平野南部）に所在する弥生時代遺跡を悉

皆的に抽出し、新出資料を含む資料状況の詳細な確認と検討をおこなったうえで、集落の存続時期、規模、内部構成・配置、区画施設の有無・構造、出土遺物などについて個別に整理することとした。またこれをふまえて、対象各地における集落数や立地・分布の時期的変化について分析・考察を実施することとした。この分析作業に際しては GIS および空間分析の手法を用いて、① 地形・水系解析にもとづく集落立地傾向変化の把握、② 空間的密度解析にもとづく集落分布パターン特性と変化の抽出などを試みている。

第Ⅱ章では以上の方法に依拠して、博多湾沿岸周辺域を対象とした検討をおこなった。分析の結果を大きくまとめた場合、当該対象域における集落の展開プロセスは、早期～前期前半（博多Ⅰ期）、前期後半～中期初頭（博多Ⅱ期）、中期前半新相～中期後半（博多Ⅲ期）、後期前半（博多Ⅳ期）、後期後半～終末期（博多Ⅴ期）、以上 5 つの段階にわけて整理することが可能である。各期の特徴とその全体的な流れをみていく中で、立地・分布パターンが安定化へと推移して大型集落の整備が進む博多Ⅲ期が重要な転換期であったと評価された。集落間と集落内に重層的な秩序が形成され、地域構造の整備・再編が生じたことがこの背景にあったと考えられ、そして博多Ⅳ期およびⅤ期をつうじてそれがより発展・成熟していったものと理解された。加えて、漢王朝との直接交渉が本格的になされていくのが博多Ⅲ期以降のことであり、集落にみる変化と国際的政治的状況の変化とが対応することが確認された。

次いで第Ⅲ章では佐賀平野についての検討を実施し、早期～前期前半（佐賀Ⅰ期）、前期後半～中期初頭（佐賀Ⅱ期）、中期前半～中期後半（佐賀Ⅲ期）、後期前半（佐賀Ⅳ期）、後期後半～終末期（佐賀Ⅴ期）という 5 つの段階を設定して集落の変遷プロセスを整理した。この結果、佐賀Ⅲ期の終わらないしⅣ期になると集落数増加が起りつつ、Ⅰ・Ⅱ期に各所で形成された分布集中域から大型集落が出現して、Ⅴ期にそれら大型集落（環濠集落）を中心に集落相互が安定的かつ強固に結合した様相を示していくという流れが把握された。佐賀Ⅲ期末・Ⅳ期が重要な転機と位置づけられるとともに、地域構造の再編がなされたものと推察された。

第Ⅳ章では筑後平野北部についての検討を進め、集落の動向を、早期～前期前半（筑後北Ⅰ期）、前期後半～中期初頭（筑後北Ⅱ期）、中期前半～中期後半（筑後北Ⅲ期）、後期前半（筑後北Ⅳ期）、後期後半～終末期（筑後北Ⅴ期）という 5 つの段階にわけて整理した。この結果、筑後北Ⅰ・Ⅱ期をつうじて集落数の増加と各所における分布集中化・多核化が進むこと、それらの分布集中域はⅢ・Ⅳ期をつうじて特定地点に統合される形で減少すること、またそれと表裏のように大型集落が次第に発達してⅤ期にかけて盛行すること、などの諸点が明確となった。中でも筑後北Ⅲ期からⅣ期は地域構造を考えるうえで非常に重要な段階と評価でき、またそれが佐賀平野の動向とも対応的な面をもつことを確認した。

第Ⅴ章では筑後平野南部を対象とした検討をおこない、早期～前期前半（筑後南Ⅰ期）、前期後半～中期初頭（筑後南Ⅱ期）、中期前半～中期後半（筑後南Ⅲ期）、後期前半（筑後南Ⅳ期）、後期後半～終末期（筑後南Ⅴ期）という 4 段階を設定して集落の変遷を整理した。各期の特徴と流れをまとめつつ、集落数が増加し、大型集落の存在が顕在化していく筑後南Ⅲ期からⅣ期を重要な転機と位置づけて、地域構造の変化が大きく進行したことを想定した。

以上の取り組みをふまえつつ、第Ⅵ章では北部九州以外の西日本諸地域ならびに中国・朝鮮半島に視野を広げた。まず西日本については、北部九州地域に接する 7 地域（釣川流域、遠賀川上流、日田盆地、別府湾沿岸、大村湾沿岸、唐津湾沿岸、杵岐）、九州以東の 4 地域（松山平野、響灘沿岸、米子平野、奈良盆地）における集落の動向についてまとめ、第Ⅱ～Ⅴ章の検討結果を含めて諸地域相互の比較・参照作業を実施した。この結果、大型集落の継続的展開や分布パターンなどの観点からみて、玄界灘沿岸周辺域（福岡平野、糸島平野）と奈良盆地の様相が西日本の中で異質であるとともに、そこに一定の共通性が認められることなどが理解された。その理由のひとつとしては、これら地域が農業生産や交通諸関係において相対的に高い優位性をもったことが背景にあると考えられるが、集落形態・構造の面をより詳細に比較すると両地域の相違も見出される。このような共通点と相違点を念頭におきつつ、次に朝鮮半島および中国における集落・都市の発展プロセスを概観することとした。

朝鮮半島を南部・北部に大きく二分し、南部の無文土器時代～原三国時代における集落と、北部の楽浪郡に関連した 6 つの都城について検討を加えた。前者に関する作業の結果、南部無文土器時代の環濠集落の規模や形態と、西日本各地の環濠集落一般との類似性がきわめて高く、弥生集落の展開プロセスが朝鮮半島南部にみる流れと密接に関わっていたことが確認された。一方そのような状況の中において、博多湾沿岸周辺域では主流をなす円形環濠が早い段階で採用されなくなり、さらに方形環濠（区画）ないし方格空間の設置がいち早く推進されるのであり、ここに当該地域の動きの特異性と歴史的意義が読みとれることを指摘した。

また、中国新石器時代から漢代に至る環濠集落・都市を概観したうえで、その発展プロセスを、1) 環濠集落形成期である新石器時代前・中期、2) 城壁の発達や集落規模の巨大化が進む新石器時代後期、3) 方格空間や内城－外城（小城－大城）の多郭構造が確立する新石器時代末期～春秋時代、そして 4) それ以前の形態・構造を継承発展させつつ新たな展開を生じる戦国時代～秦漢代、という 4 つの大まかな段階にわけて整理した。この作業結果にもとづき、弥生時代および無文土器時代の環濠集落一般のあり方は 1) とよく対応するものと評価でき、また佐賀平野の吉野ヶ里遺跡群、奈良盆地の唐古・鍵遺跡などの大型環濠集落は 2) ないし 1)、2) の中間的な位相とみると理解を深めやすいと考えた。これに対し、博多湾沿岸周辺域を代表する福岡平野の須玖遺跡群や比恵・那珂遺跡群、糸島平野の三雲・井原遺跡群などは、円形状の環濠を継続的に採用しないこと、またその規模が 2) 以降のものに匹敵することなどに加え、3) 以降の重要な構成要素である直線区画・方格空間をいち早く定着させて、重要な諸機能を集約的・計画的に配置している。弥生中・後期にみるこの一連の動きは、都市的萌芽・成長として評価することが可能なものである。それは大陸部との位置関係において卓越した地理的条件をもつこの地域であればこそ顕在化しえた特有の現象であったと考えられる。

終章では以上の検討結果を総括する中で、北部九州地域の集落の動向においては若干の時期差を伴いつつも対象各地で大きく共通の時期に重要な変化が生じており、そのプロセスが一定程度に共有されたと考えられること、中でも弥生中期後半から後期前半の時期に集落の発展・変化が大きく加速したと評価できること、などの点を指摘した。また一方で、それが一律な内

容をもって進行したのではなく、博多湾沿岸周辺域（福岡平野，糸島平野）とそれ以外の地域とで質的な違いがみられることも重要な点として確認した。そして上述の弥生中期後半から後期前半の時期を中心に，中国史書の記録などもふまえてその歴史的・社会的背景について考察を加えた。結果，紀元前1世紀頃の楽浪郡の成立とそれを介した前漢王朝との交渉を契機に，福岡平野（「奴国」），糸島平野（「伊都国」）が主導的な役割を果たして北部九州を包括する政治・経済・社会体制の編成と強化が目指されたこと，そしてそれが弥生後期の早い段階に一定の成熟を遂げたことなどが想定された。外交と社会構造の変革とが不可分のものとして推進された点に重要な特質があり，また以後の展開をふまえてそれが国家的様相へ向けての節目になったと理解した。